



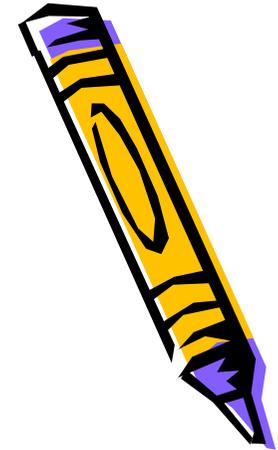
組織のイメージ

マルチ・パースペクティブとしての組織論
キャリアステージ編

早稲田大学
井上達彦



あなたの組織を描いてください



- 1枚の画用紙に描いてください。
- 何かに喩えて(たとえて)みてください。

4名に描いて、そして
喩えてもらおうかな。



組織論者の中では有名な話で、テキスト(金井『経営組織』日経文庫)でも取り上げられています。

何を示しているのか

- あなたの描いた絵
- あなたのイメージ(たとえ)

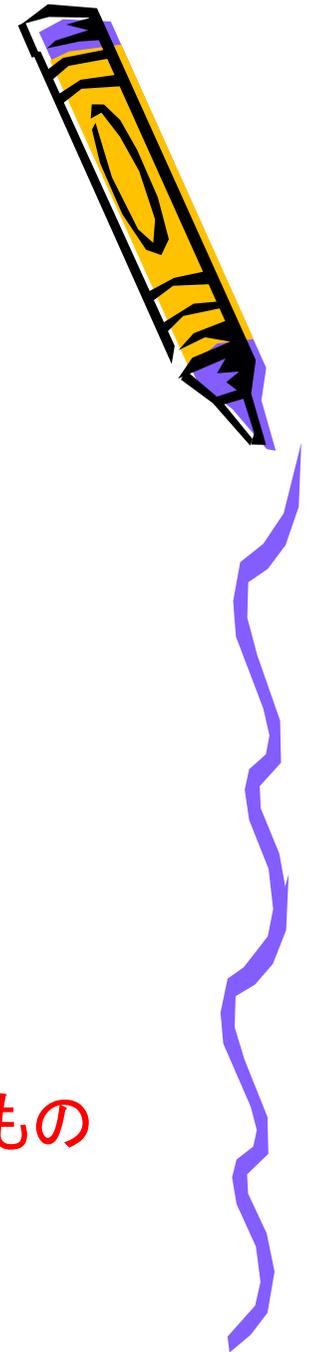
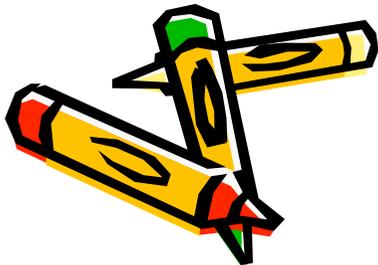
これらは、何を示しているのでしょうか。

レベル1

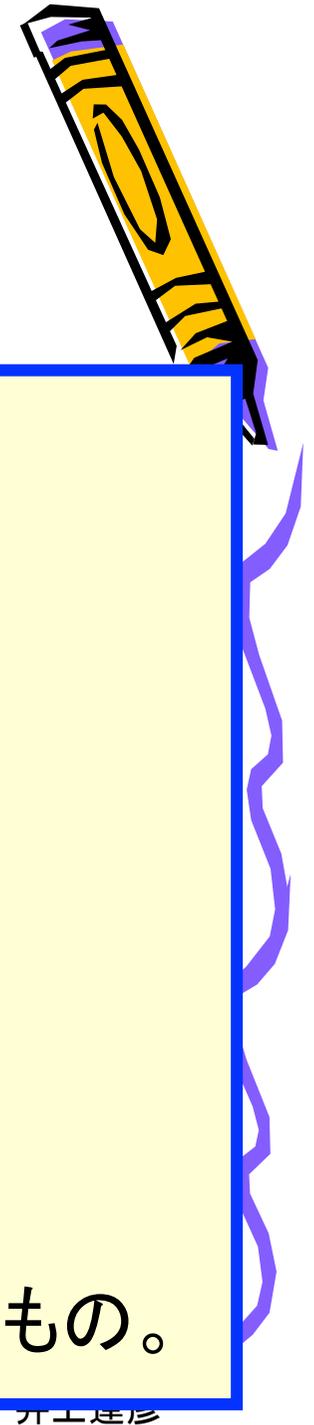
→ 組織の見える方、組織のどの部分が見えているか

レベル2

→ より根本的な組織観の違い、認識の仕方にかかわるもの



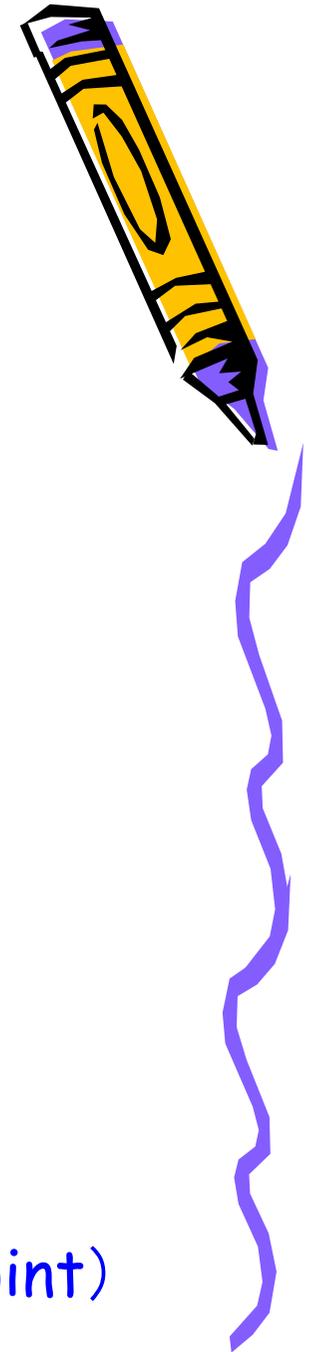
レベル1
組織の見える方、組織のどの部分が見えているか



複数の視角

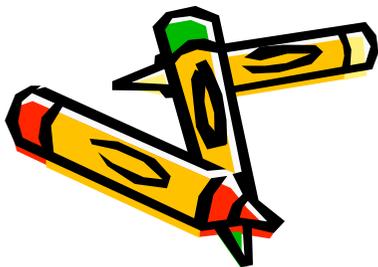
- 6人の盲人が象を触りました。
 - 1:「葉っぱみたいだ」
 - 2:「否、壁みたいだ」
 - 3:「巨木だ」
 - 4:「槍だ」
 - 5:「ロープだ」
 - 6:「蛇だ」
- みんな、部分部分しか見えてないのね！
 - 私たち(研究者含む)は、6人の盲人のようなもの。

レベル1
組織の見え方、組織のどの部分が見えているか



複数の視角の功罪

- 功罪の「功」
 - 多面的に捉え、「リアリティ」に近づく
 - 一つの側面では象はみえない
- 功罪の「罪」
 - それでも完全にならない
 - 互いに矛盾する
 - → 曖昧で不確かな印象を与える



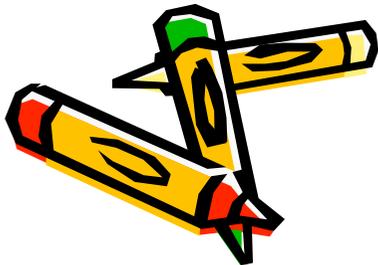
(要チェックPoint)

レベル2
より根本的な組織観の違い、認識の仕方にかかわるもの



多面的なリアリティの限界

- ・ 実は、この「6名の盲人と象」の考え方はモダニストの呪縛から逃れることができていない。
 - 本当に、客体的な「象(=リアリティ)」が存在するのか?!
 - 「象(=リアリティ)」というのは、社会的に構成されたものなのではないか?!



巨象ならぬ虚像?!

組織の定義

- 「だって組織って**実体がある**ようで**ないんだもん**」
 - 人の集まりではない
- 定義
 - 「二人以上の人々の意識的に調整された諸力の体系」(C.I.バーナード)
 - 人を入れ替えても組織は成り立つ
- **あると思うからある?!**

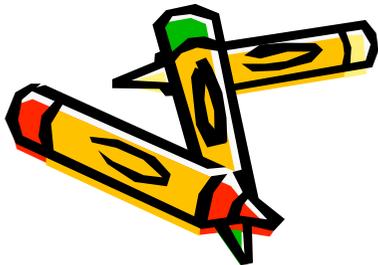
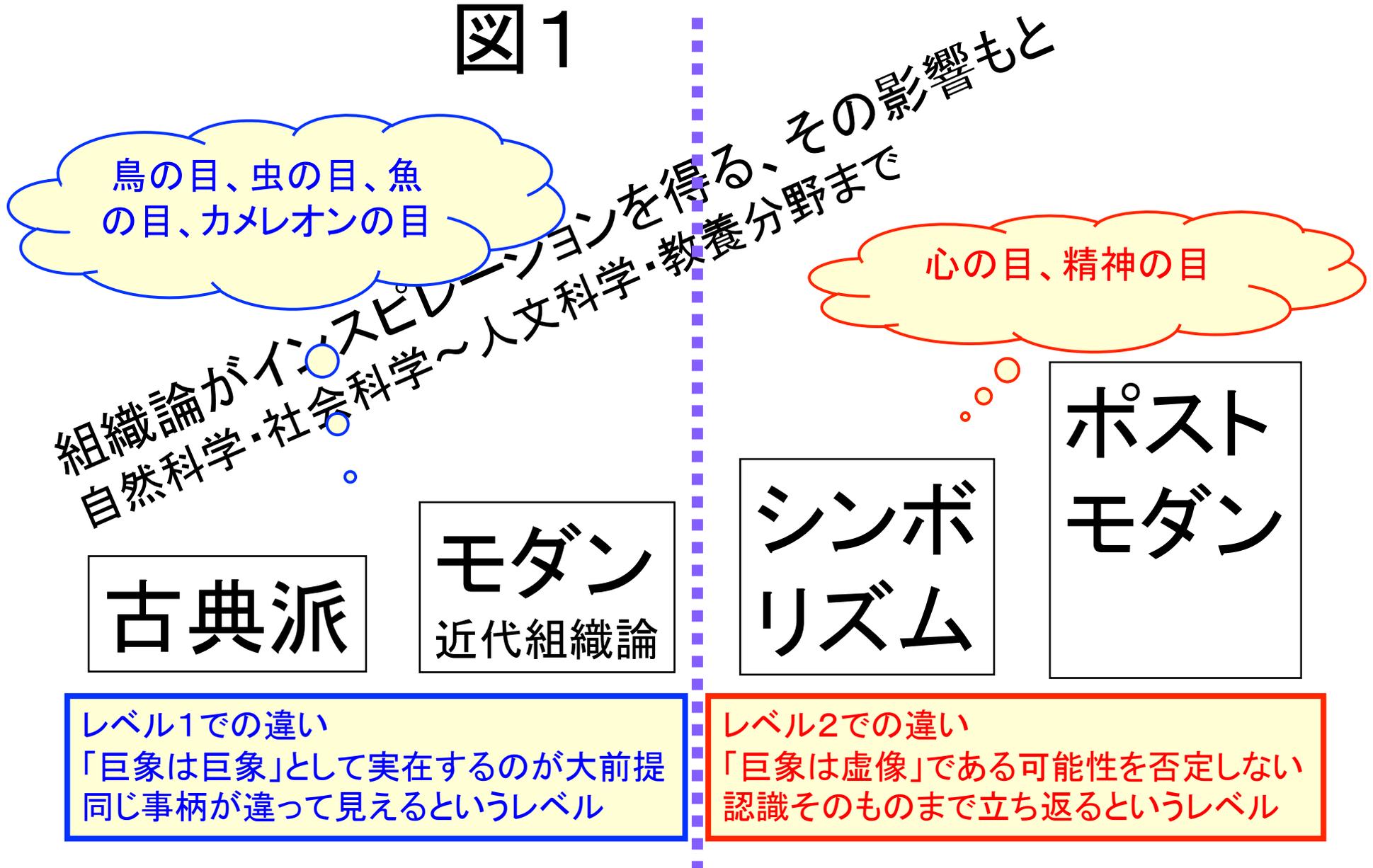


図1



組織論における異なる視角

図1 組織理論へのインスピレーションの源

スライド作成協力者: 嘉戸さん

カルチュラル・スタディーズ
文学理論
記号論
ポスト構造主義理論

ポストモダン建築学

言語学
記号論
民俗学

文化人類学
社会人類学
産業社会学
生物学-環境学

政治科学
社会学
工学
経済学

古典

モダン

象徴的解釈主義

ポストモダン

アダム・スミス(1775)	ハーバート・サイモン(1945,1958)
カール・マルクス(1967)	タルコット・パーソンズ(1951)(社)
エミール・デュルケム(1893)	アルフレッド・グールドナー(1954)(社)
フレデリック・ウインスロー・テイラー(1911)	
アンリ・ファヨール(1919)	ジェームズ・マーチ(1958)
マックス・ウェーバー(1924)	メルビール・ダルトン(1959)
チェスター・バーナード(1938)	ルードビッヒ・フォン・ベルタランフライ(1968)

アルフレッド・シュッツ(1932)
フィリップ・セルズニック(1948)
ピーター・バーガー(1966)
トーマス・ラックマン(1966)
クリフォード・ギアーツ(1973)
アービング・ゴフマン(1971)
ウィリアム・フート・ホワイト(1943)
ポール・リクール(1981)
ウラジミール・プロップ(1928)
ロラン・バルト(1972)
フェルディナン・ド・ソシュール(1959)
ケネス・パーク(1954)

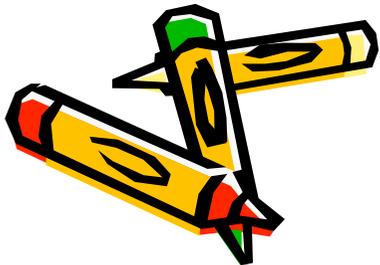
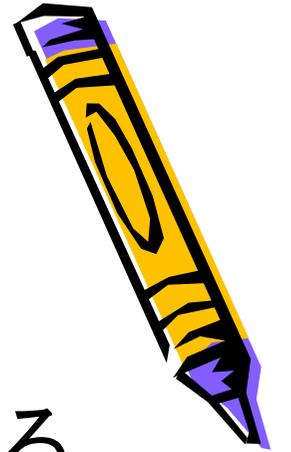
マイケル・フォーコート(1972, 1973)
チャールズ・ジェンクス(1977)
ジャック・デリダ(1978, 1980)
ミハイル・バフーチン(1981)
ジャン-フランソワ・リョタール(1984)
リチャード・ローティ(1989)
ジャン・ボードリヤール(1988)

それぞれのハコがこの本でフレームワークとして使用した組織についての4つの主要な思考体系を示す。ハコの上の年代はその思考体系がその分野で顕れた時代を示す。貢献的原理はハコの上に示し、影響を与えた思想家はハコの下に示した。いくつかの貢献は組織理論に影響を与える前に現れた。それは、原理間の伝播の欠如を示す。

Hatch, M. J. Organization Theory, Oxford University Press, 1997, pp.

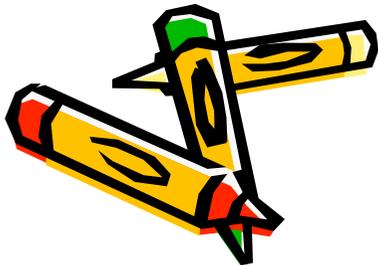
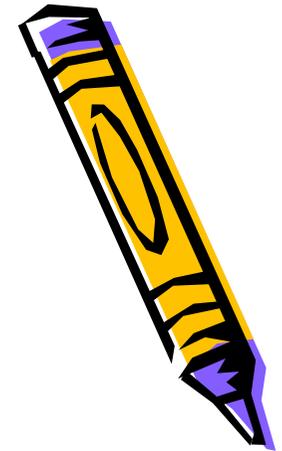
図1 について

- それぞれが、異なった認識論に立っている
- 新しいものが古いものにとって代わるわけではない
- むしろ、積み重なっていく
- それぞれが互いに影響しあって常に変化している
- これが、組織論なんだ！

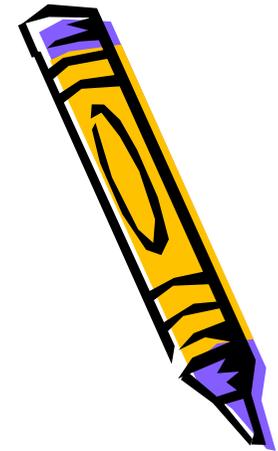


さまざまなレンズ

- 「レンズ」をうまく使い分ければ、組織についての説明がつくはず…。
- この「レンズ」使い分けと使いこなしのスキルこそが重要！
 - 海では魚眼(レンズ)
 - ジャングルではカメレオンの目(レンズ)
 - 夜間はふくろうの目(レンズ)



12の捉え方



- ①協働の体系
- ②価値と意味の体系
- ③規則の体系
- ④生涯発達の間
- ⑤多元的重複集団
- ⑥意思決定装置
- ⑦対立と創造の源
- ⑧ハコ(組織図)
- ⑨受動的環境適応装置
- ⑩能動的環境適応装置
- ⑪価値創造の仕組み
- ⑫社会問題解決手段

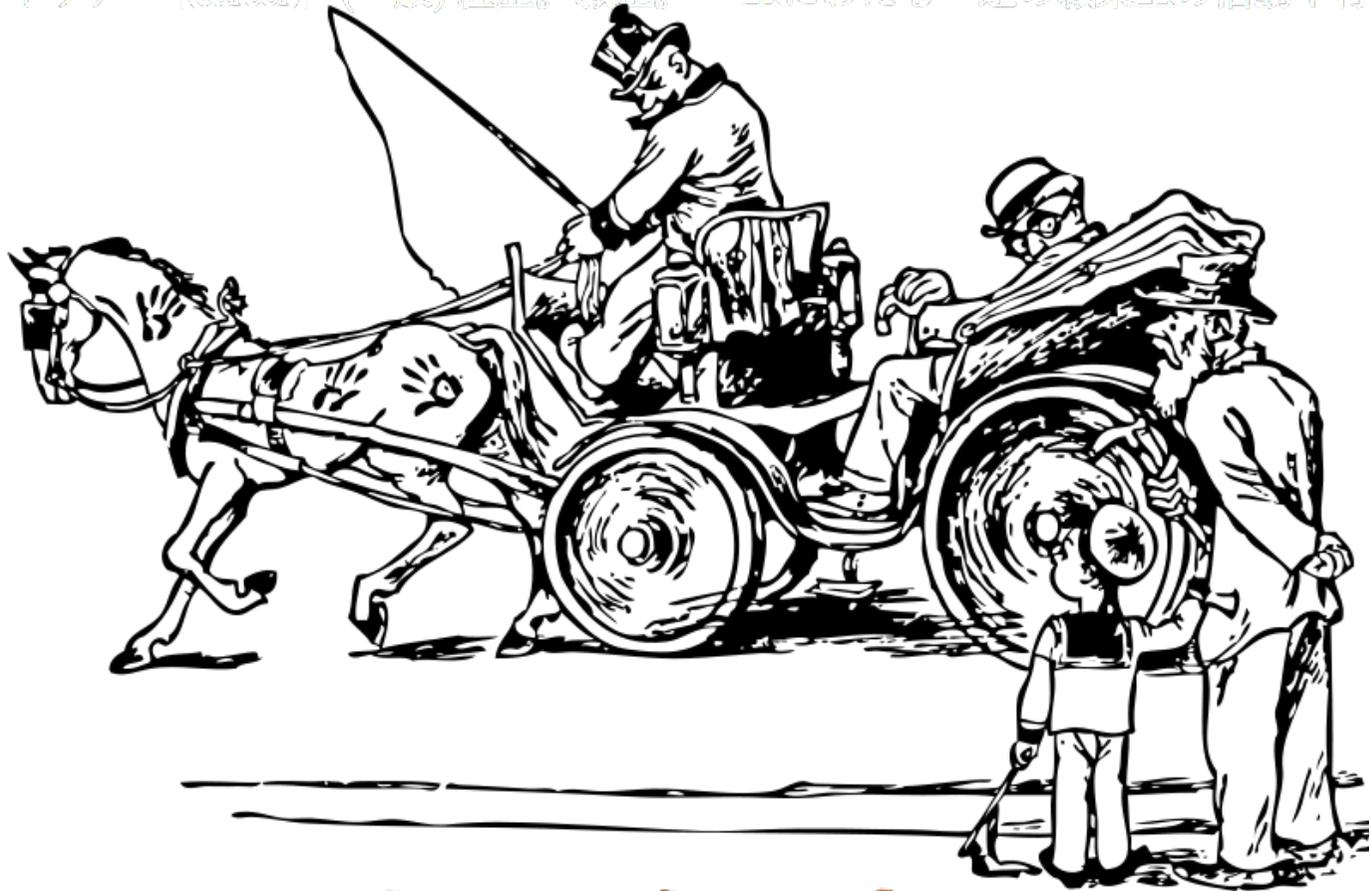


稲葉・井上・鈴木・山下『キャリアで語る経営組織』有斐閣

研究を参考にして

キャリア - 【career】(一般) 経歴。職歴。一生にわたる一連の職業上の活動や行為。

キャリア - (career) (一般) 経歴。職歴。一生にわたる一連の職業上の活動や行為。



キャリアとは

馬車が遠い道のりを旅する様を思い浮かべる。

今日わかって欲しいこと

- ✓ 色々なレンズがある。
- ✓ 組織が違えば見やすいレンズも違う。
- ✓ 違うレンズで同じ組織を見れば、その組織の違う側面が見える。
- ✓ レンズの内容と使い方を学ぶのが大切。
- ✓ 組織の定義

